

リクルールの解釈過程論

——クレム解釈批判

卷 田 悦 郎

本稿の目的は P・リクルール (Ricoeur) の解釈過程論についての D・E・クレム (Kleim) の解釈を反駁することである。

一九七〇年以來観点を異にするいくつかの論考を通じて発表されたりクルールの一般解釈学 (cf. IT 78, PJ 91-6) は、解釈がいかなる段階を踏んで進行するかということに関する議論をその構成契機として含んでいる。我々はこの議論を解釈過程論と呼ぶことにする。(2)

それによれば解釈は素朴な了解から始まり、構造分析を経て批判的了解に至る (ECQ 131, CI 307, cf. IT 74-5, 87, ESD 186-7; MT 557)。素朴な了解とは物語の筋を追ってゆくだけの浅い解釈である。論文によつてはこれはテキストの意味の全体的、主観的把握である推測 (pari, guess) として特徴付けられている (COM, IT, MT)。構造分析はテキストの形式的関係の分析であり、批判的了解は構造分析に媒介された洗練された了解である。

本稿の対象は、しかし、リクルールの解釈過程論そのものではなく、それについてのクレムの解釈である。彼はテキストが解釈過程の第一段階から既に、テキストがそれについて語っていると

世界を開示していると考えた。だが、リクルールの叙述に照らして見た場合、この解釈はどれほど妥当であろうか。

クレムの解釈を反駁するために我々は次のような手順に従つて議論を展開する。本論は大きく I と II 二つの部分に分かれる。I はクレム批判のための準備である。我々はここで、まずクレムの「解釈過程論」解釈の概要を示す (a)。次にクレムがいかなる根拠に立つてそのような解釈を引き出したのかを探り (b)、更にクレム解釈の持つ限定的正当性を確認する (c)。II で我々はクレム解釈に対する四つの反証を提出する。その第一は構造分析による指示中断の延長 (a)、第二はリクルールの反ガダマリの意図 (b)、第三は言述過程論と解釈過程論に於ける世界概念の規定形式の一致 (c)、第四は解釈過程論に於ける世界論の位置 (d) である。

I

a クレムの解釈

本稿で批判的検討の対象となるのは、クレムの著書『ポール・リ

クルルの解釈理論——構成的分析』(HTR)に於ける彼の「解釈過程論」解釈である(esp. HTR 90-108)。クレムはリククルに二つの異なるテキスト世界概念を認め、この区別に基づいて解釈過程論に一定の解釈を与えている。従って、クレム解釈がいかなるものであるかを知るには、まずこの区別を見ておかなければならない。

クレムはテキスト世界概念がリククル解釈学の中心概念であることを述べてから、この概念を二つの場合に分けて説明する(HTR 85-7)。第一の場合は解釈学的に無意味な場合、つまり、記述的テキストの開く世界、知覚可能な世界である。第二の場合は解釈学的に有意義な場合である。ここでは世界は詩的テキストの開く虚構的世界である。クレムは前者を「解釈学的に問題とならぬ」(HTR 85)と行うことによって実質的に排除してしまう。こうして彼はテキスト世界概念をさしあたり次のように規定する。

「『テキスト世界』は虚構的言語の力によって開かれた指示の総体を意味する。虚構的言語の力とはテキストの内容に依って形成される諸形象を連想させる力である。」(HTR 86)

テキスト世界は「想像された文学的世界」(HTR 90)なのである。

この後直ちにクレムはこの規定にあてはまらないもう一つのテキスト世界概念があることを指摘する。但し、それは今排除された知覚世界ではない。もう一つの世界とは「前批判的な読みを遮断し、虚構的意味の構造を詩的メッセージの根底にあるコードとして分析し、更に、この構造の指示力に従うことによって形成される世界で

ある。」(HTR 86) 彼はこの二つの世界概念は同じ一つの用語で包括するにはあまりに異質であるとして、最初の概念を単に「テキスト世界(world of the text)」「第二の概念を『存在論的世界(ontological world)』と呼んで区別した。前者はテキストの内容の対応物、後者は構造の対応物である。テキスト世界がテキストから読者が直接形成する世界であるのに対し、存在論的世界は構造の把握に媒介されている。前者は読者の想像力の所産であり、後者は記述(description)の所産である(HTR 87)。

この区別に基づいてクレムはリククルの解釈過程論を再構成する。彼の解釈のポイントは、正にテキスト世界を素朴な了解に、存在論的世界を批判的の了解に割り当てることにある。

素朴な了解の段階では読者は「直接的な読者」として、想像力の中でテキスト世界を構成する。ここでは読者はテキストの指示物と一体化し、自らの状態について無反省である(HTR 144, 153)。次に読者は「批判的主体」として素朴な了解を停止し、テキストの内在的、形式的な関係(構造)を分離してこれを分析する。クレムはこの段階で指示が中断されると言うが(HTR 102-3, 106) これは素朴な了解の段階では指示は中断されていなかったことを意味する事実、テキスト世界は「指示の総体」とされていた。

だが、構造は決して自己目的なものではなく(HTR 95)、「指示の徴」(HTR 106)である。構造が指示の発出点であることが認識されたところで構造分析は批判的の了解に乗り超えられ、構造は存在論的世界を開示する。ここでは読者は「反省的」である。読者は素朴な了解を概念的に再捕捉してこれを構造と比較し(HTR 107)。

最終的に真の自己を発見する(HTR 108)。

b クレム解釈の根拠

次に、IIでのクレム批判をより決定的なものとするために、クレムの解釈が基づく世界概念の区別の更なる根拠を探る。

彼がテキスト世界を規定する際に引用、参照しているリクルの著作は、「疎隔の解釈学的機能」(FHD)の英訳⁽⁴⁾(HFJ)、「哲学的解釈学と神学的解釈学」(PIH)、『解釈理論——言述と意味の充溢』(IT)の三つである⁽⁵⁾。第二の論考の前半部分は第一の論文にほぼ相当し、引用箇所は重複部分にすべてある。

「疎隔の解釈学的機能」(FHD, HFJ)及び「哲学的解釈学と神学的解釈学」の前半は言述が伝達媒体として話者から読者へ移行する際に被る変化を辿っている論文である。ラングは話者に於いて言述(Discours, discourse)の出来事として実現し、出来事は伝統的な意味へと止揚され、意味は文字に記される。文字化された言述、つまり、テキストは作品として構造化され、その産出の状況を超えて新しい状況の中で世界を開示する。最後に、この世界が読者に同化される。我々はこの過程を言述過程と呼ぶことにする。この論文は言述過程論なのである。確かに、解釈過程論的な主張が見られないわけではない。テキストは作品としての構造を持ち、その解釈は構造の説明を必然的に經由する。しかし、記述はほんの僅かで、解釈過程の段階性も不明確であり、解釈過程論は言述過程論の中に完全に埋没してしまっている。

クレムによる引用はテキスト世界を論じている節(FHD, IV;

HFD, 3; PIH I-3)からのものである。この世界論によれば、世界は言述の文字化、エクリチュール化をもって開示する。パロール(音声言語、対話)に於いて言述は対話者が共有する狭い物理的空間、つまり、環境(Umwelt)を指示しているが、書き記されてエクリチュールとなる時、この環境への指示(Reference, referencé)、明示的指示を失う。だが、これはテキストが指示を持たないということではない。詩的テキストでさえ指示を持つ。それは操作可能な日常的現実への指示を排棄することによって、より根源的な指示を解放するのである。

ここで注意すべきことは、構造分析ではなくエクリチュールが世界開示の条件だということである。無論、既に述べたように、この論文は断片的な解釈過程論を含み、しかも、それは今見た世界論に先立っている。しかし、世界論の中に構造分析への言及はなく、また、議論の流れからも両者の関係は不明である。

クレムのもう一つの典拠は『解釈理論』(IT)であった。参照部分は第二章「パロールとエクリチュール」の世界論である。この章は第一章「言述としての言語」と共にこの著作の言述過程論を構成している。クレムはここでも言述過程論を参照しているのである。この著作に限らず、言述過程論と呼べる部分では一般に、世界は構造分析への言及なしに、ただエクリチュールないし文学との関係に於いて論ぜられている。もし、世界開示の条件がエクリチュールに尽きるのだとすれば、エクリチュール化は著者の時代に起こることであるから、世界は素朴な了解の段階は勿論、解釈が始まるずっと前から開示していることになる。

次に、我々はクレムが存在論的世界を規定する際に用いた根拠を見る。彼が参照しているのは「テキストとは何か」(QT)と『解釈理論』の二つである。参照箇所は正確な位置は不明であるが、重要なのはそれが解釈過程論にあるということである。どちらの箇所でも、構造分析の限界と機能、構造分析後の世界の開示が問題となっている。構造分析はテキストが言述であることを否定できず、むしろテキストの指示を一旦抑制することによって根源化し、次の段階で世界として開示させる。この二論文に限らず(CCM 49-52, MT 545-59)、解釈過程論では世界は一般に構造分析や批判的理解との関係に於いて議論されている。これは世界が批判的理解に於いて初めて開示することを示唆している。

言述過程論では世界はエクリチュールを条件として開示するとされ、解釈過程論では構造分析を条件として開示するとされる。クレムはこの違いに注目して構造分析以前に開示している世界と構造分析後に開示する世界とを区別したのである。

c クレム解釈の正当性

我々の主要な目的はクレム解釈の反駁にあるが、しかし、これはクレムの解釈が完全な意味で誤っているということではない。それは解釈過程論の正しい解釈とは言えないが、限定的な正当性を有する。クレムの解釈はいかなる正当性を有するのか。

第一に挙げるべき正当性はbで今述べたことに関わる。言述過程論には構造分析への言及がなく、世界はただエクリチュールをもって開示するのに見える。言及されていないからといって関与しな

いということにはならないが、少なくともそれはクレムのように構造分析以前に世界が開示していると解釈する余地を与えている。

だが、クレム解釈が正当なのはこうした消極的な意味に於いてばかりではない。一九七〇年の「解釈の現在の諸問題」(PI)及び「テキストとは何か」(QT)はクレム解釈の必然性さえ示している。この二論文は世界論が未発達で、「世界」(monde)という語は用いられていても、後の環境概念と同じ意味に於いてである。しかし、後の世界概念に相当するものは存在する。言述過程論(PI, II 3-4; QT, I)ではそれは「準-世界」(quasi-monde)、「アウラ」と呼ばれている(PI70, QT 184-5)。これは指示を失ったテキストが他のテキストと共に構成する世界である。これに対し、解釈過程論(PI, II 5-13; QT, IV)では「世界」は「深層の意味」、「意味の生」、「深層意味論 (la sémantique profonde)」、「テキストが主張すること」、「テキストの志向 (intention) が思考に対して開く方向」などとされている(PI, 179-82, QT 198)。言述過程論と解釈過程論とは「世界」の表現形式に何ら共通性がないのである。これはリクールが両者を別物と考えていたからであると推測される。クレムがこの事実を示唆されたか否かは明らかではないが、彼は正当にも二つの過程論の世界を質的に区別した。

これに加えて、この二論文は構造分析以前の世界開示を示すある表現を含んでいる。その表現とは「準-世界による周囲世界の隠蔽 (l'occlusion du monde ambiant par le quasi-monde)」(PI, 171, QT 188)である。この隠蔽はテキストに対する二つの態度を可能にするときれる。一つはこの周囲世界(環境)の隠蔽、つまり、指示の

中断に乗じてテキストの内的関係を分析する構造分析、もう一つはこの中断を解除してテキストを生きた伝達過程に戻し、パロールとして完成させる同化（批判的的理解）である。このうちまず採用されるのは構造分析である。環境は単に隠蔽されるのではなく、準世界によって隠蔽され、そしてこの隠蔽が構造分析を可能にする。従って、準世界は構造分析以前から開示していなければならぬ。準世界はエクリチュール化によって開示し、この開示は少なくとも構造分析までは続く。ここには素朴な了解への言及は存在しないが、別の箇所（PI, 179-80, QI, 197）から素朴な了解が構造分析に先行する解釈過程の一段階であることがわかる。従って、素朴な了解に於いて読者は世界に直面しているのである。

世界を二つに区別し、素朴な了解に世界の開示を認めたクレムの解釈は、この点で正しい。だが、一九七〇年のこの二論文について言えたことが果して一般解釈学の全体にあてはまるであらうか。クレムの解釈はこの論文の解釈としては正しいのであろうか。

第二の正当性は、クレムの解釈がこの時期のリクルール解釈学の要諦である言述の指示性の原理に忠実なことである。言述は閉じた体系であるラングと違って常に、何ものかについて語っている⁽¹⁰⁾。それは言語に内在的な意味（Sens, sense, Sinn）だけでなく、言語外の現実への関係である指示（Bedeutung）をも有する。言述は現実を根を下ろしている。この原理に従えば、テキストは言述の一形態として（II, 23）やはり常に指示を持っている。しかも、テキストはエクリチュールであるから、その指示は非明示的な指示である。書き込まれた言述は直接確かめられないような現実、つまり、世界を指示

する⁽¹¹⁾。従って、テキストは常に世界を有する。素朴な了解はそのようなテキストの解釈であるから、世界に閉まっているはずである。

この意味でもクレムの解釈は正しい。だが、構造分析はテキストを閉体系として扱う読み形式ではなかったのか。テキストは疎外され、我々に語りかけなくなっているからこそ解釈する必要が出てくるのではないのか（II, 74）。

II

このような正当性にもかかわらず、クレム解釈は以下に示されるような四つの反証に出遭う。これらは世界の開示を素朴な了解にまで遡及させるクレム解釈に反し、世界の開示が批判的了解到まで延期されることを直接的に（a, b, d）、あるいは間接的に（c）主張している。

a 指示中断の延長

既に触れたように「解釈の現在の諸問題」と「テキストとは何か」では、それが産出された状況からのテキストの自律は二つの態度、つまり、構造分析と同化を可能にするときされる。同様のことは「テキスト・モデル」（MT）と『解釈理論』（II）でも言われている。但し、今度は同じテーマがクレムにとって不利な事実として現れる。

「エクリチュールによって可能になり、文学によって実現された周囲世界の捨象は二つの対立する態度を生み出す。読者として我々

は、指示されるあらゆる現実に関する一種の中断状態にとどまることが可能である。あるいは、新しい状況、読者の状況の中でテキストの潜在的な非明示的指示を想像的に実現することもできる。第一の場合、我々はテキストを無世界的実体として扱い、第二の場合、読み行為が含意している「演奏」によって非明示的指示を生み出すのである。(IT 81. cf. MT 553 傍点、引用者)

この引用文で注目すべきことは、まず、「解釈の現在の諸問題」と「テキストとは何か」に於いて「準世界による周囲世界の隠蔽」と言われていたものは、単に「周囲世界の捨象」(abstraction from the surrounding world)とされていることである。この消極的な表現から直ちに構造分析以前の世界開示を導き出すことは不可能である。次に注目すべき点は、構造分析に於いて読者が指示の中断状態にとどまるとされていることである。構造分析とはエクリチュール化による「明示的指示の中断を延長すること」(TT 81, MT 554)なのである。しかし、中断されているのは明示的指示だけでなく、指示一般である。中断は「指示されるあらゆる現実に関して」なされる。その際テキストは「無世界的実体 (a worldless entity)」(MT 554. cf. IT 81)なのである。エクリチュール化から構造分析に至るまで指示が中断されている以上、「テキストによって開かれた指示の総体」⁽¹³⁾である世界は素朴な了解の段階では開示していない。

素朴な了解の段階に仮にも指示の総体と規定される世界の開示を認めたクレムの解釈は、この点で妥当性を欠く。確かに、「解釈の現在の諸問題」と「テキストとは何か」では構造分析以前に準世界が

開示しているとされる。しかし、準世界は指示ではなく、むしろ意味に近い何かである。それは複数のテキストが集って作る世界である。

b 反ガダマー的意図

リクールはガダマー解釈学を批判する中で次のような証言を行っている。

「テキストをそこで語る「事柄 (chos)」から「了解」しようと主張する前に、構造分析がテキストの深層意味論を明らかにするまで客観化の途を可能な限り進んでいなければならない。テキストの事柄はテキストの素朴な読みが開示するものではなく、テキストの形式的配列が媒介するものである。」(HCI 54. cf. ECH 163)

リクールが 'chos' と訳した 'Sache' はガダマーの概念で、テキストが語っている内容、テキストの真理主張を意味する。ガダマーはテキストをその背後の著者の生表現としてではなく、テキストそれ自身が語っている事柄に於いて了解すべきことを主張した⁽¹⁴⁾。リクールはこの概念を「世界」と言い換え⁽¹⁵⁾、やはり了解されるべきは著者の意図ではなく、テキストがその前に展開する世界であるとした⁽¹⁶⁾。しかし、彼はガダマーと違って、最初からテキストをその世界に於いて了解することに反対した。これは読者が予めテキストの意味に帰属し、歴史的作用を被っているのだとすると、伝承に対して批判的な態度をとることができないからである。リクールのガダマー批判もこの点に集中している (TH 199)。

読者はむしろ、事柄から了解する前に客観化の途を十分に進んでいなければならない。客観化とは具体的には「テキストの形式的配列」の分析、つまり、構造分析である。構造分析を通じて初めて深層意味論、即ち、⁽¹⁷⁾世界が開示する。構造分析に先立つ「素朴な読み」の段階では、従って、世界は開示していない。世界はテキストの構造が媒介するものなのである。

リクルールのこの証言はクレムの解釈と完全に相容れない。確かに、それはガダマー批判という特殊な背景を有する。しかし、ガダマー批判は彼の一般解釈学にとって偶然的、派生的なものではなく、むしろ、その出発点の一つであった (cf. TH, FHD, ECH 157, CH 97-9)。従って、その証言がガダマー批判を背景としているからとらって、一般解釈学の構造を反映していないということにはならない。

c 二つの世界の同一性

クレムは言述過程論の世界と解釈過程論の世界の間に重大な相違を認めたが、本当に両者は違っているのであろうか。我々はむしろ、二つの世界が同一のものであることを示そう。

同一性の第一の根拠は、言述過程論に於いても解釈過程論に於いても世界は非明示的指示によって規定されていることである。「テキスト・モデル」(MT)を例にとると、⁽¹⁸⁾言述過程論(MT, D)では世界は「テキストによって開かれた指示の総体」、「非明示的指示によって投企された世界(Welt)」(MT 536)とされる。テキストが開く指示が非明示的指示であることは文脈上とだけでなく、リ

クルールのエクリチュール論の論理からも明白である。解釈過程論(MT, II)でも世界はやはり、「テキストの非明示的指示」(MT 557, cf. IT 87)、「テキストの指示によって開かれた世界・提起」(MT 558)、「話される言語にとつての明示的指示の、書かれた言語にとつての等価物」(*ibid.*)とされている。エクリチュールに於ける明示的指示の等価物とは非明示的指示に外ならない。

第二の根拠は、どちらの過程論でも世界が「世界内存在」、「存在様式」といったハイデガールの用語によって規定されていることである。言述過程論に我々はそのような表現を見出す。

「可能的な世界内存在の様式 (manieres)」(CCM 49)

「我々の世界内存在の象徴的次元」(MT 536, ES 20, ESD 182)

「我々の世界内存在の新しい次元」(MT 536, ES 20, ESD 182)

「世界内存在の新しい可能性」(FHD 213)

「テキストの前に展開されるような世界内存在」(*ibid.*)

「この可能的世界」(CH 30)

「可能的な存在様式」(MT 536, ES 20, ESD 182)

これらはすべて世界を表している。他方、解釈過程論には次のような世界の記述様式が見られる。

「この深層意味論によって開かれた世界内存在」⁽¹⁹⁾(CCM 53)

「可能的な世界内存在の様式 (modes)」(CH 225, cf. ES 23, ESD 185)⁽¹⁹⁾

「世界内存在の様式」(CH 226)
「可能的世界」(IT 87, 88, CCM 52; MT 558)
「新しい存在様式」(TT 94, CCM 53, CH 227)

この二つの表現群を比較してその間に意味のある相違を見出すことは困難である。確かに、既に述べたように、「解釈の現在の諸問題」(PD)と「テキストとは何か」(QT)の場合、両者の間に表現上の相違が認められる。しかし、この二論文は出来事と意味の弁証法、世界(非明示的指示)論といった一般解釈学の基本的契機を欠き、この解釈学が形成の途上にあることを示している。このような未発達な形態をもって一般解釈学の全体を判断するわけにはいかない。一九七一年以降の論文、著書では、むしろ言述過程論の世界と解釈過程論の世界は同一のものとして記述されている。

従って、この二つの世界の異質性の前提に立つクレム解釈は疑わしいと言わなければならない。彼は決して自己の解釈の妥当範囲を一九七〇年のこの二論文に限定していたわけではないのである。

無論、両者が同一であると言うだけではテキスト世界と存在論的世界の区別は疑問に付されても、世界の遡及そのものはまだ反駁されない。なぜなら、第三段階で開示すると同質の世界が第一段階にも開示していると解釈する余地が残されているからである。しかし、ここでの議論はdの議論と結びつくことによって、開示の遡及を積極的に反駁しうるようになる。

d 世界論の位置

クレムの解釈に反して世界が批判的理解に於いて初めて開示することは、解釈過程論に於ける世界論の位置からも明らかである。素朴な了解の段階で世界が開示しているとすれば、解釈過程論の「素朴な了解について述べている部分で世界について議論されていてよいはずである。しかし、実際には議論はなく、むしろ既に述べたように世界論は批判的理解に関連して展開されている。世界は批判的理解(同化)⁽²⁰⁾の対象なのである。これに対し、「素朴な了解」論にはそもそも「世界」という語がなく、また、テキスト世界概念に相当する「非明示的指示」、「深層意味論」、「事柄」といった語さえ存在しない。無論、言及されないことと存在しないこととは別のことである。しかし、世界は触れても触れなくてもよいような概念ではない。それは「了解の真の対象」(MT 557)、「解釈学の対象」(HH 222, HR 39, ND 493, d. PTH 40)、「解釈学的問題の中心」(FHD 202)である。この概念の重要性からいって、「言及の欠如は不在、つまり、世界の未開示を意味している」と理解すべきである。

確かに、これに対して次のような反論があるかも知れない。解釈過程論が言述過程論から独立している場合(QT, CH, CCM, IT, MT)、例外なく後者が前者に先行している。「構造分析」なき世界論が言述過程論で展開されており、解釈過程論は多くの場合素朴な了解についての議論から始まっている。従って、リタールは直前で展開された世界論を「素朴な了解」論で繰り返す必要がなかったのである。「素朴な了解」論が世界論を欠くのはテキスト世界が開示していないからではなく、世界の開示が当然のことだからである。世界論の不在は世界の不在を意味しない。

しかし、構造分析は指示を根源化するのである以上 (MT 557, IT 87)、素朴な了解の段階で世界が開示しているとすれば、構造分析後の世界は以前の世界とは別様に規定されていてよいはずである。

ところが、c で見たように、言述過程論の世界と解釈過程論の世界は同一のものとして規定されている。従って言述過程論の世界は構造分析後に開示する世界と考えるべきであり、それ故また、言述過程論の先行性を根拠に素朴な了解に於ける世界の開示を導き出すことはできない。だが、そうであるにしても、なぜ言述過程論では世界の開示に構造分析が関係付けられていないのであろうか。

これは言述過程論の観点の特殊性による。言述過程論と解釈過程論とは先後関係にあるが、これは言述過程と解釈過程が先後関係にあるということではない。言述過程が完了してから解釈過程が始まるのではない。言述過程は読者によるテキストの受容によって終わるのであるから、解釈をその一部として含んでいるのである。それにもかかわらず解釈過程で再びこれを論じているのは、単に同じものをより詳しくというだけでなく、別の観点から考察する必要があるからである。解釈過程論は同じ受容の出来事の特にその段階性に注目して記述する。この結果、言述過程論では解釈は単一なものとして現れるのに対し、解釈過程論では素朴な了解・構造分析批判的的了解というように三つに分節されて現れる。

言述過程論に於いて構造分析が言及されていないのは、構造分析なしに世界が開示するからではない。構造分析は前提されているのであるが、観点の制約上言及されなかっただけである。実際には、解釈過程論的観点の下で明らかになるように、構造分析は世界の開

示に関して決定的な役割を演じている。それはエクリチュール化に中断されていた指示を世界として回復する。明示的指示が非明示的指示に根源化されるのである。⁽²²⁾言述過程論の世界は解釈過程論の世界と同一であるというだけではない。それは、同時に、別の観点から見たものなのである。

解釈過程論に於ける世界論の位置は解釈過程に於ける世界の開示の位置を正確に反映している。世界論は批判的・了解論に位置しており、従って、素朴な了解に於いて世界は開示していない。この点でもクレムの解釈は正しくない。

リクールの解釈過程論に関するクレムの解釈は妥当であろうか。我々はこの問題から出発した。彼によると、テキスト世界は解釈過程の第一段階から既に開示している。読者は素朴な了解の段階で想像力によってテキスト世界を構成し、構造分析に於いて指示を中断してテキストの内在的、形式的な関係を分析し、批判的・了解に於いて構造が開示した世界を本来的に同化する。クレムがこうした解釈をとったのは言述過程論の世界と解釈過程論の世界の間に、世界開示の条件に関わる大きな相違を認めたためである。前者は素朴な了解に於いて開示している世界、後者は批判的・了解の世界である。言述過程論の叙述や言述の指示性の原理はこの解釈を支持しているように見える。

だが、クレムの解釈はいくつもの点で欠陥を持つ。第一に、構造分析はエクリチュール化による指示の中断を延長するとされるが、これは素朴な了解の段階でも指示は中断されていることを意味す

る。指示が中断されていれば世界は開示していない。第二に、最初からテキストを世界に於いて了解しようと主張するガダマーを批判して、リクールは世界は素朴な了解が開示するものではなく、テキストの構造に媒介されるものであると明言している。第三に、言述過程論と解釈過程論の間では世界の規定形式に何ら相違がなく、両者は同一のものと理解されるべきである。第四に、解釈過程論で於ける世界論の位置は世界が素朴な了解ではなく、批判的了解到いて開示することを示している。言述過程論の世界は批判的了解到いて開示する世界を別の角度から記述したものに外ならぬ。従って、クレムの解釈は妥当な解釈とは言えない。これが本稿の結論である。

だが、我々はクレム解釈とは別の正しい解釈があると考えているわけではない。本稿の問題設定の制約上示すことはできなかったが、リクールの解釈過程論は単なる思想の発展、変化には還元できない根本的な曖昧さを含んでいる。それはクレム解釈と対立する解釈と共に、クレムの解釈をも許している。我々がクレムの解釈の限定的正当性を指摘したのはこのためである。しかし、この点については別の機会に詳しく論ずることにしたい。

〈略号表〉

〈Gadamer, Hans-Georg〉

WM *Wahrheit und Methode : Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*, Tübingen, J. C. B. Mohr(Paul Siebeck), 1975⁴.

〈Kleinn, David E.〉

HTR *The Hermeneutical Theory of Paul Ricoeur : A Constitutive Analysis*, London, Associated University Presses, 1983.

〈Ricoeur, Paul〉

CCM 'Du conflit à la convergence des méthodes en exégèse biblique' *Exégèse et herméneutique (Parole de Dieu)*, éd. par X. Léon-Dufour, Paris, Seuil, 1971; pp. 35-53.

CH 'Cours sur l'herméneutique (1971-2)' Louvain, Institut Supérieur de Philosophie.

CI 'The Conflict of Interpretations' *Phenomenology : Dialogues and Bridges* 〈Selected Studies in Phenomenology and Existential Philosophy 8〉, ed. by R. Bruzina and B. Wilshire,

Albany, State Univ. of New York Pr., 1982; pp. 305-312.

ECH 'Ethics and Culture : Habermas and Gadamer in Dialogue' *Philosophy Today* 17 (1973) : 153-165 [No.2・4, Summer].

ECQ 'Expliquer et comprendre : Sur quelques connexions remarquables entre la théorie du texte, la théorie de l'action et la théorie de l'histoire' *Revue philosophique de Louvain* 75 (1977):126-147 (n°4, fév.).

ES 'Événement et sens' *Révélation et histoire : La théologie de l'histoire* (Actes du colloque international, Rome, 1971), Paris, Aubier, 1971; pp. 15-34.

- ESD 'Événement et sens dans le discours' *Paul Ricœur ou la liberté selon l'espérance* (Philosophes de tous les temps), éd. par M. Philibert, Paris, Seghers, 1971.
- FHD 'La fonction herméneutique de la distanciation' *Exegesis: Problèmes de méthode et exercices de lecture* (Bibliothèque théologique), éd. par Fr. Bovon et Gr. Rouiller, Neuchâtel, Delachaux et Niestlé, 1975; pp.201-215.
- HCI 'Herméneutique et critique des idéologies' *Demythisation et idéologie* (Actes du colloque international, Rome, 1973), Paris, Aubier, 1973; pp.25-61.
- HFD 'The Hermeneutical Function of Distanciation' *Philosophy Today* 17(1973): 129-141 (No.2 • 4, Summer), trans. by D. Pellauer.
- HH 'Herméneutique philosophique et herméneutique biblique' *Exegesis* (FHD ㊦㊧㊨㊩) pp.216-228.
- HIR 'Herméneutique de l'idée de Révélation' *La Révélation* (Publications des Facultés universitaires Saint-Louis 7), Bruxelles, Facultés universitaires Saint-Louis, 1984²; pp.15-54.
- IT *Interpretation Theory: Discourse and the Surplus of Meaning*, Fort Worth, The Texas Christian U. P., 1976.
- LH "Logique herméneutique?" *Contemporary Philosophy: A New Survey*, vol. I (Philosophy of Language, Philosophical Logic), ed. by G. Fløystad, The Hague, Martinus Nijhoff, 1981; pp.179-223.
- MT 'The Model of the Text: Meaningful Action Considered as a Text' *Social Research* 38 (1971): 529-562 (No. 3, Fall).
- ND 'Nommer Dieu' *Etudes théologiques et religieuses* 52(1977): 489-508 (n°4).
- TH 'La tâche de l'herméneutique, *Exegesis* (FHD ㊦㊧㊨㊩), pp.179-200.
- PH 'Phénoménologie et herméneutique' *Man and World* 7 (1974): 223-253 (n°3, août).
- PI 'Problèmes actuels de l'interprétation' *Bulletin du Centre Protestant d'Études et de Documentation* (1970): 163-182 (n° 148, mars).
- PJ 'A Philosophical Journey: From Existentialism to the Philosophy of Language' *Philosophy Today* 17 (1973): 88-96 (No.2 • 4, Summer).
- PL 'Philosophie et langage' *Revue philosophique de la France et de l'étranger* (Le langage et l'homme) 103 (1978): 449-463 (oct.-nov.).
- PTH 'Philosophische und theologische Hermeneutik' *Metapher: Zur Hermeneutik religiöser Sprache* (Evangelische Theologie, Sonderheft), München, Kaiser Verlag. 1974; S.24-45, übersetzt von K. Stock.
- QT 'Qu'est-ce qu'un texte? Expliquer et comprendre' *Hermeneutik und Dialektik* (Hans-Georg Gadamer zum 70. Geburts-

tag), hrsg. von R. Bubner, K. Cramer und R. Wriehl, Tübingen, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1970; Bd. II, S. 181-200.

注

- (1) 略号表に挙げたものはその主なものである。
- (2) リクール自身は解釈過程を「解釈学的アーチ (l'arc hermeneutique, the hermeneutical arc)」¹⁾「解釈的アーチ (l'arc interpretatif, the interpretative arc)」²⁾と評す。
- (3) リクール自身は「批判的解釈 (l'interprétation critique, the critical interpretation)」³⁾なる語を用いる。
- (4) 厳密に言うならば、議論が少し入れ替わっている外、議論の有無、詳しくはついで多少の相違が見られ、本邦の英訳とはなす。
- (5) HTR, Ch. 4, n. 36—HFD 141 (PTH 32, FHD 213), n. 37—PTH 31—2 (HFD 140, FHD 212), n. 38—IT 37, n. 39—PTH 32 (HFD 141, FHD 213).
- (6) リクールは言述が、ハロールを介せず直接記される可能性を決して無視してはならないが (IT 28, CH 26, QT 182, PI 169)、ハロールの介在を前提して議論することが多し。
- (7) QT 183-5, ES 16-22, ESD 178-83, CCM 47-9, MT 530-45, CH 8-65, FHD 203-15, HCI 52-6, IT 1-44, ECQ 130.
- (8) Ch. 4, n. 40—QT 198, n. 41—IT 87.
- (9) ここで見るように、QT では「世界」なる語はなっていない。

45。

- (9) ES 17, 20; ESD 178, 181; IT 36; MT 531, 535; PL 456; CCM 48; FHD 204; CH 29, 163.
- (11) QT 184, CCM 48-9, MT 53-6, ES 20, ESD 181-2, CH 29-31, MPH 106-7, IT 34-7, ND 493, FHD 211-2.
- (12) 原文は 'new ostensive' であるが、この意味は 'non-ostensive' と訂正される。
- (13) ESD 182, MT 535-6, ES 20, MPH 157, IT 36. cf. IT 37.
- (14) WM 173, 181-2, 276, 294-5, 372
- (15) FHD 210, 214; HH222 (PTH 39); HCI 54; PH 234; ND 493; LH 206; HIR 38, 46.
- (16) CH 224-5, ESD 185, ES 23, MT 557-8, PH 234, FHD 212, IT 87, ECQ 132, PL 462-3, HIR 38.
- (17) 「テキストの深層意味論は著者が言おうとしたことではなく、テキストがそれについて語っていること、即ち、テキストの非明示的指示である。」(MT 557)
- (18) 前注に反し、この表現は前注の引用文で続く文と共に、深層意味論と世界が別物であることを前提しているように見える。しかし、同様のことは指示と世界との関係についても言える。世界は「テキストによって開かれた指示の総体」(注13を参照のこと)とされるが、他面では「テキストの指示によって開かれた世界提起」(MT 558)とも言われる。従って、その表現から深層意味論と世界の非同源性を導き出すことはできない。
- (19) ES, ESD の場合、独立した解釈論はあるが、解釈過程論

とはなっていない。

(20) 批判的理解は「同化概念を満たす」(TT 74)とされ、また、
注釈なしに同化と言ひ換えられることがある (MT, IT)。

(21) CH 225; ESD 185; CCM 51; MT 558, 561; ES 24; MPH
108; PH 235; FHD 214; IT 92, 94; ECQ 133.

(22) 同じ指示の根源化であっても、世界が素朴な了解の段階で
開示すると考える場合、根源化されるのは非明示的指示であ
り、開示していないのと考える場合は明示的指示である。

(まぎた・えつろう 筑波大学大学院哲学・思想研究科在学中)